

---

# 僕らの戦う理由

ACES

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの戦う理由

### 【Nコード】

N1256G

### 【作者名】

ACES

### 【あらすじ】

何となく思い付いたので、勢いそのまま書きました。一応背景は統一して、オムニバス形式で投稿します。内容は過激ですので、ご了承ください。

## 僕の戦う理由（前書き）

一部グロテスクな表現があります。ご注意ください。

## 僕の戦う理由

破壊された建物の瓦礫の積もるこの小さな陣地。

装備に統一性のない兵士が、注意深く陣地の外を見張っている。

僕も、その一人だ。隣にいるか弱い女の子も、少し離れた位置にいる童顔の彼もまた、その一員だ。

僕らの見張っている瓦礫だらけの十字路をいくつかの陣地で守っているが、その陣地を守っている兵士のほとんどは正規の訓練を受けた兵士ではない。

ほんの二ヶ月前、僕らはまだ中学二年生だった。

十字路の南東に位置する僕らの陣地の指揮官は、大学生だった人だ。南西陣地の指揮官は消防士だった人。

北西陣地の指揮官は、元警察で、機動隊をやっていた人。

北東陣地の指揮官は、正規の訓練を受けた人。

二ヶ月前、突然現れた軍勢によって街は爆撃に遭い、それから逃げ惑ううちに、僕らは銃を手になっていた。

僕は、すでに人を手にかけていた。

怖かった。

隣にいた仲の良い友達が、頭から、口から血を吐き出しながら壁にもたれ、壁一面に彼の血がべっとりと付いていた。

突然発生した戦闘に巻き込まれた僕たちは、生き残るために必死で銃を手にした。

クラスで一番の運動神経の男の子は、目の前で起きた爆発で上半身を失って消えた。

いつも笑顔を振り撒いていた女の子は、隠れる途中で流れ弾を浴び、全身から血を噴き出しながら僕に倒れ込んだ。

いつも強気だった人は、自分の身体から血と内臓が飛び出したのを見て、しばらく悲鳴を上げ続けた後、動かなくなった。

僕が必死に飛び込んだ扉の先で、大勢の人たちが自らの命を断っていた。

いつの間にか、僕の周りに何人かの人がいた。皆武器を手に、顔に服に返り血の跡を覗かせながら、ここにいた。

それから大勢が集いはじめ、僕らは戦場にいることを、兵士になったことを知った。

本当は、こんなことやりたくないはずなのに。

いつの間にか、当たり前前になっていた。

それにもう、安全な場所なんかなかった。

新たに現れた敵との戦闘が始まった。

最初の攻撃で、僕らの陣地に爆発があった。

ちょうど奥の部屋に移動していた僕は、偶然にも無傷だった。

身体を起こして周りを見渡すと、仲間たちの多くが傷を負っていた。

すぐそばに、隣を守っていた女の子がいた。

胸に浴びた砲弾の破片から、僅かに煙が立ち上っている。

助からないことは、誰の目にも明らかな傷だ。

女の子は懇願するように僕に顔を向けた。

僕が手を取ると、彼女は力尽き、頭を瓦礫に落とした。

無事な何人かが必死に抵抗を始めたが、もはや抵抗にならなかった。

僕は必死に引き金を引いたが、すぐに弾がなくなった。

はじめから、弾などほとんど尽きていた。

僕は銃を棄てた。銃火の飛び交うなか、僕は自分が撃たれていることを知った。

ちょうどヘソの上の辺りだ。今すぐ治療を施せば、助かるかも知れない。

けれど、その希望は無かった。怪我の治療など、僕にはできない。

治療が出来る唯一の人間は、たった今最期を看取ったのだから。

不思議な気分だ。

痛みは無い。

怖さも感じない。

生き延びるために命を奪ったことを、ここにきて後悔した。

一人の敵の銃口が、僕に向けられた。

僕が戦う理由は

## 俺の戦う理由

全く冗談じゃない。

休暇中に呼び出しは職業柄よくあることだが、今回は大事な予定があつたんだ。

まあ、いい。とにかく、仕事じゃ仕方がない。命令は絶対だからな。しかし、待機かと思っていたら、どうやら違つらしい。基地が随分と騒々しい。

こりゃあ、何かあつたな。

何の説明もなく艦に乗ったらいきなり戦闘配置とは、穏やかじゃないな。

おっと、よく見ると随伴する艦もどうやら本気らしい。

って、実弾運び込んできやがったか。

何事だ？

轟音が辺りを包む。

と同時に、海面が吹き上がる。

轟音を響かせ、砲撃の応酬が始まる。

閃光が煌めき、白煙や黒煙で周囲が包まれる。



「弾だ！弾運んで来い！」

担当する機銃から発射される曳航弾を頼りに、上空を飛び回る敵の機体を狙う。

「右から来るぞ！」

騒々しい発射音に負けじと声を張り上げる。

接近してきた敵機がコントロールを失うと、眼前の海面に墜落した。

あぶねーあぶねー。

彼の真上を一陣の轟音が飛び去る。

見上げた彼の目の前で投下された爆弾が、随伴艦に直撃した。その瞬間、地震と錯覚するほどの振動と共に随伴艦が爆発し、轟沈した。

ほどなくして、敵艦隊が距離を詰めてきた。

奴ら、乗り込んでくるつもりか！？

敵の艦が平行し始めた。

彼は敵の陸戦隊に向けて、攻撃を開始した。  
敵の陸戦隊が血飛沫を飛ばし、倒れていく。

「弾はまだか!？」

彼は周りを見渡すと、弾を運んでいた部下がそばに倒れている。  
足元に弾が落ちている。  
弾を運んだところで、被弾したのだろう。

すまねえな。だが、ありがたく使わせてもらっぜ。

その瞬間、敵艦の副砲が背後で炸裂し、彼は爆風で壁に叩きつけられた。

舌を嚙んだのだろう、口から血が溢れてくる。

乗り込んでくる陸戦隊の銃撃が、胸を貫いた。

死ぬんだな、俺。

まあ、でも、

給料分は戦ったかな。

それにしてもだ。

くだばるにしても

割に合わねえ、仕事、だ

## わたくしの戦う理由

わたくしが退屈な毎日から抜け出すきっかけは開戦だった

こう見えてわたくし、クレー射撃にはちよつと自信があるの

もちろん人を撃つのは、初めは躊躇ったわ

でも、もう慣れたわ

さすがに退屈しのぎ・・・というには不謹慎な状況よね

使用人たちも以前は戦いを経験したことのある傭兵だったようね、  
わたくしに勝るとも劣らない射撃の腕だわ

わたくしたちは街を守るために自警団を結成したの

もちろんリーダーはわたくし

参謀はジイ、幹部は使用人たち、団員は志願者

総勢30人ほどかしら

抵抗勢力として、これは多いのかしら、少ないのかしら

よくわからないわ

ただ言えるのは、わたくしたちは今、警戒に当たっているということ

何日か前に陣地の一部が壊滅した激戦地の交差点で、未だに敵とのにらみ合いが続いていた。

最初の奇襲で陣地が一ヶ所砲撃の集中砲火を浴びて壊滅し、若い少年の多くが命を落とした場所だ。

あら、まだ埃っぽい

よほど激しい攻撃だったのね

けど、今は特に異常はないようね

一発の銃声が響き、ジイが瓦礫の上に倒れ込んだ。

ジイ……？

脚でも……滑らしたの？あのジイが？

……いや、違う

……ジイは撃たれたんだわ

「お嬢様、私めのことはいいです。お逃げください。相手は……  
凄腕です。」

冗談じゃないわ

そんな後味の悪いこと出来るわけないでしょう

それに、参謀がいなくなったら困るのよ

見てなさい

ライフルを構えて敵を探す。

・・・いた

銃声が響き、束ねた髪の毛が一部弾ける

すぐさま狙いを定め、撃った

どうやら仕留めたようね

急いでジイを後送して手当てを・・・

ジイは彼女を掠めた弾にこめかみを貫かれていた。  
誰が見ても、手の施しようがなかった。

ジイ・・・？

どうして・・・ジイはいつも側にいたのに・・・

自由なんていらなわ

退屈だなんていわないわ

だからわたくしのいいつけを守りなさい、ジイ！

ジイ・・・逝かないでジイ・・・

たしかにジイの存在が鬱陶しかったこともあつたわよ・・・ジイから離れれば解放されると思つたわよ・・・

けど、

こんな、こんな自由を求めるためにわたくしは戦つたわけではないわ

わたくしは

## オレの戦う理由

さすがに余裕とまではいかないか

陸の王者って言われても所詮は消耗品ってことか

とはいえ、そう簡単にはやらせねえ

こう見えて俺は部隊一の射手なんだからな

しかも純国産製の自動装弾システムは開戦からこっち大活躍だ

自慢じゃないが敵の戦車4両撃破してるんだぜ

ま、日頃の訓練の成果ってやつだ

車上にある機関銃の射手も、操縦士も部隊で一、二位を争う腕だ

今回も生き延びてみせるさ

車上の機関銃が敵の対戦車部隊を発見し、攻撃すると、後続の車両の射手もそれに倣う。

それを皮切りに、敵の激しい攻撃が始まった。

周囲の林や丘から、対戦車ロケットなどによる攻撃に加え、正面から敵の機甲部隊が迎撃に現れた。

カウボーイのお出ましか！



あの数なら余裕で撃破できるな・・・

一気に行くぜっ！

戦闘は激しく、短かった。

彼は撃破スコアを二つ増やしたが、部隊は戦車と乗員の何名かを失った。

が、失ったのはそれだけでは無かった。

正気を失う者や、理性を失った者が現れ始めたのだ

まさか・・・操縦士が『アテ』られるなんてなあ・・・

たしかに、最前列で敵の集中砲火を回避し続けるってのは神経を使うよなあ・・・

今、敵の奇襲でも受けようもんならヤバいかも・・・

その時、彼のすぐ脇で弾丸が戦車の装甲で跳ねる音がした。彼は慌てて戦車に搭乗した。

敵は少数の決死隊で、大量の爆薬を身につけていた。手榴弾を惜し気もなく投げってくる。

そこかしこで、爆発音が連鎖していた。

くそっ

こんなに接近されちゃ主砲は使えねえ

射手はまだ戻ってない

やられちゃったのか

いずれにしても厳しいな

・・・動いたな

相変わらず仕事の早い操縦士だぜ

射手の安否はともかく、今は互いの距離を離さなくては・・・？

彼の戦車は一目散に敵の決死隊に向かって突進していた。

おいまさか・・・

戦車で生身の人間を轢くつもりか！？

冗談はよせ！

・・・くそっ

まるで聞こえちゃいねえ！

野郎マジでイカれやがった！

まっすぐ突進してくる戦車を見て、慌てて抵抗しようとする決死隊だったが既に遅かった。

一人、また一人と、戦車の下敷きとなり、断末魔の悲鳴を上げた。

やめろ！

そんなことしてどうなるんだ！

操縦士は辛うじて車体にへばりついて難を逃れた敵の兵士を捉え、目隠しをした。

そして、無抵抗の敵に向けて車上の機関銃を乱射した。  
脅威的な威力の弾丸が敵の亡骸を、原型がわからなくなるまでズタズタに切り裂いた。

その様子を見ていた回りの仲間が、操縦士の蛮行を止めに入っただ、正気を失った操縦士は仲間を敵と同じようにズタズタになるまで弾丸を浴びせた。

もうやめろ！

彼は拳銃を操縦士に向けた。

操縦士は彼にも銃口を向けたが、既に弾は尽きていた。

もう弾は無い

大人しく両手を上げて・・・

操縦士は拳銃を抜き、彼に向けた。

操縦士は容赦なく発砲してきた。

幸い、操縦士の眼は焦点がずれていて、当たらなかった。  
やむを得ず、彼は操縦士を撃ち抜いた。

まさか、仲間を撃つはめになるなんて・・・

オレは虐殺するために戦ったんじゃない

オレは仲間を殺すために戦ったんじゃない

オレは・・・

オレが戦う理由は・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1256g/>

---

僕らの戦う理由

2010年10月12日19時26分発行